鎌倉見聞志

廿四
廿五

へ 違13
2475
20

續今昔軍談巻之廿四

目録

一　東寺法師蓮生の身獨と脱る事

へ13
2475
20

浄土念仏年號巻之上目録

真宗東大法師導選せらるの序偈

殿として年

言ふに我国の衆生私の意の惣諸宗

治部少丞ある我宗ふ依じ都保詹

なりて衆生なりしふ宗門のへ邪しもしむ

余りやありて建久元年のゑ上下棔のまえ

と平所のるやるす第作めてとてそげ りくるり

梶原が讒言によつて利をもちながら忠実
越後の国へ下りけると様々見えけり世の変る
おもひしは都のうちへ帰りしに其ふしぎ
なさけうつくし給へと切りてにうかぶ郷より
此より法然上人の御弟子となり地蔵菩薩の
御仏にてよつて往生随喜の功徳をも
より極楽の一つの蓮台にのぼれど称名念仏の
功力や忠実合掌して十念と唱へ

うた念仏して地中に蓮を生じしに見えたに
向ひて蓮台にのぼり見しけるが往生の
紫雲たなびきと楽のひびきしはるかにきこえけり
けふのくもにのぼり蓮台に昇りながら
面影もくらくその身のうへ仏を念じて耳
心も時ざるがごとく殊勝にも残しさうか
あくがれしかびしね筆にかけて仏の名
忠実が事と伝へしその尊さしるしとも

蓮生法師申しけるハ[illegible]法華経
ハ仏道の[illegible]も[illegible]に[illegible]
されハ[illegible]の[illegible]我
迷[illegible]と[illegible]
ありし[illegible]が三段[illegible]
[illegible]の月[illegible]
事[illegible]
[illegible]の[illegible]

懺悔[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]一族の末葉[illegible]
敦盛[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

存生のうちこそ国のたからなれども臨終の夕には随

ぜんのことも夜中の夢とこそ○しかれば

我俗性は武略の家の名人継家の所

忠勇のうへにも一つとしてなかりけるを勤めし達

生死のことはりは前世の因縁によりたるに

邪路を見すてゝ一生の菩提とこそなく

親しくなく此世の命をすてゝ快楽を得んと

身ならぬれども無常の道理をとげんのとゞめなり

かゞみをもつて秋と郷をしんへとゞめて聖教

なりしんで排除しつゝ貴賤を用ひて梅花のこと文

まことに知らぬ人は備ふべきのみかは

ごくらくを願はんものは見え華蓮信じてのぞ

来世の寂光の影の夜の如くなりし

かのしい御への来世のことを渡ると

備ふにありとしふ輪回しけるとなり

あはれなるもけれりたりて行くとけるふ

亭主を損してたよりなくかんにんしく
くらしかねし法華経をよみけれど
ある法師の行けるにまかせ念仏申
さしとのなかにいひて念仏十
遍となへしかと損しもとより失
文と損へしまよりければ亭主もたゆ
おりつひにわかれてゆくえしらず
坊主ならしもりけるとなしみ

乱心のとき南無阿弥陀仏と十遍唱ふ
るに一段の損こしそのまゝ損しと
ふみまよひとあさましきの海に唱へし
念仏に形ちからなくもつれしかど
蓮華経はたゝくにたつよりかつら
ふる我が唱へし念仏は一念に一蓮と
生れて十遍となへし千葉蓮花生れ
ゆへに損はしたりとしもしそ

亭主煙しこそ行しかば其より僧を
こゝ後世と仏を頼みぞつかへまつり識して念仏と
申すへしまして臨終か蓮台に極楽に
其名念仏しつゝ称名念仏まで声に
こゑへ申すに紫雲たなびき音楽して蓮
花ふりけるに如くはしとの往生の亭
まことぞしつらくければまさにで
縁ありしに蓮華結縁ふ十念唱へ法ぞ

十三の蓮花にのりしこゝろありける由聞え亭主
はしぐつとこそそのまゝ文とつてかり
ト盛に今の往生の仏へ申しらんやと結
こゝろみとけりてこゝ公の末をとみやく
盛衰しつゝ時に極ぞ見ぬやぞ
なりとしてをわりくてとそのか蓮台
坊その営つけして備えしてなりお
涙と法文せつのこよい近海

まさしかりければ天照大神の御ちかひ
よまれざりけり清盛の御母は白河院の女
御にておはしけるが懐妊ありけるを
ありしかば忠盛にたまはりて清盛を
まうけたりけるとなんさればにや一天の
君の御ためにはうしろみとなり奉りて
いよいよ繁昌しけるが忠盛ひとへに
高く王の御はからひなるにや

入道相国いまだ若かりし時より心ざし
七月十日に都へかへり上りけれど
世の人は事いかにもありけんと
のぞみ給ひけるに入道相国の
[illegible]
小松の大臣の御事は[illegible]
しからば[illegible]
[illegible]

こゝに名誉の勇士ありしに武名を残く
佛の小御しゆつけし三寶の御名をとなへ
達すべからざる道をのぞみしにこゝろをかけざる
勇士ありてさかりしきまでかりの佛事
つくり解脱の座としてこゝろを一心にかけ
まことに我心年々せしめしことなかりけ
わざと出家の修行のごとく命をすて
ごとくひたすらに出家の身となりてまめやか

いさゝかまことしからずしてあさましく我身の終び
まさりやうしにて若の心をうしなひて報じたてまつる
ぞうしく出家し来世を見てもしらず菩
周のこゝろにしらぬやら頓にさとりの
うるやまと経に世俗のさまをめぐらしの
こゝろなく田舎にいたりてまもなく道の
かどいかにも志をたてしに身をたて後の
われらも給銭に同じくしてくべき者の終く

修行の菩薩かくのことくに念をおこし[illegible]
凡機縁の種をおこすはかりなり[illegible]
うつしかへ法はかくのことく[illegible]
ふかくしり釈迦如来浄土の法門にもとづき良
久しく部[illegible]して[illegible]法華[illegible]
蔵経[illegible]の四[illegible]
華[illegible]法[illegible]の
武[illegible]の[illegible]

古[illegible]のこと[illegible]
[illegible]法華[illegible]
たすけ[illegible]の[illegible]蔵[illegible]
[illegible]の[illegible]本来
の[illegible]
うけし[illegible]たる法華
蔵の[illegible]
[illegible]○[illegible]

まうけられてしかしなから見聞せしも
かくいかなる修行と守りぬるが浄土の
さうらふすやうにてさく粗末と
なげくにつけても涙にむせび君と
ち誓しさまうふまくらんや俗目にもおよ
まかせんし行業と更めしそれはり
なる我が身雑言ふうへり一誰にも対面
しく弥陀仏の功力を念かしらると頌て

後人と離別しけるに浄土寺ふもと岳院
弥陀仏のお給ひしに出世後信がうちみそ
御しん将の浄土の経をよみ信心をと
新発意にこしめたまふ我が身にてこそ後へ
かかりたるが彼の御身の根とうくてん
かすひを届ふかりうそくまに対面し
かの花清風さし其の名文の名目と近海
そうしき流しての後にさてそ蓮華が帰へ

にく蓮花の生せし事をきゝて此所
菊紫とふきし観音の示現ありし
也へ瑞と現れ天神しく出現の事と
しるしびて田しまてる事左の様にしく
いつ近江に知られて居るとも天満宮
がいく居にふうしん持りくるとの事へ
ごろういにてうる御祀物のなすめくまで
菅家の格外是そ一旦我持りしてる

なしかど近江しかど其の所ふかう
ざい現れくへて旅立ち行くべし
力なしいかふも交納せんしと現れしうが
菩薩行きて〇にて御前の儀式を申て
己くて海と御くる僧とくつとうくるべし
と行るゆへ辛是をとやすく僧の申くるべ
庭前の其ヘゆうしやう役人ことくざ下
こうそお角出殿の其きてうりこうく

ひごろ人事あやまりなくして行年廿五歳
にして出家をとげしかば、かゝる事を世の人
とりしらるゝことなりけるを、ある
ころ母にむかひ我身のうへを申せしが
善信がいはく、そのはじめふかく心得
しる十遍の念仏をとなへて給ひ
しかありしが、ある日極楽へ念仏は
其信のしるへにふかく心かけよと申せば
いふ事をしりてのちに、花を摘
み、ふかくしたひてたる浄瀬の念仏をとなへ
ともし十遍の念仏にて我をうかゞひ
しるとて我をみちびき、十方の
念仏をとなへて我にうへしを、是程の
南無なりしを、人の帰依をかうむりまゐ
らせ、たとへし十遍の念仏の功力に
我十念ゆくは海をわたりて参らする

一遍たりとも唱(しやう)へたらん蓮生(れんせい)はやし
念(ねん)仏とぞ千聞(もん)なり十萬遍(べん)の念仏(ねんぶつ)をまさば
やかて十遍(べん)もなく済(さい)れが為(ゐ)のりとゝる
多く女人亭(てい)より精(しやう)進(じん)に念誦(ねんじゆ)し南無(なむ)阿弥陀仏
念佛(ぶつ)の称名(しやうみやう)千遍(べん)となへ給ひけるが
蓮生(れんせい)信(しん)心(じん)ふかくして法(ほう)然(ねん)上人の弟(で)子(し)と
なりぬへ(へ)せしとて我(わが)身(み)しうらく尊(たつと)けり
とゝまる道(だう)体(たい)の菩(ぼ)提(だい)けるに亭(てい)主(しゆ)大へ命(いのち)の氣(き)

もつばらに因(いん)縁(ゑん)修(しゆ)に二世(せ)のちぎりを増(ぞう)
ずる所(ところ)なりとおもひしが念仏(ぶつ)ふ極(ごく)
楽(らく)げ(け)く往(わう)生(じやう)をとげてきのふ千年(ねん)まで
まちしくいゝ(い)けりのふ蓮(れん)花(げ)でてとゝ
けふこそ称(しやう)名(みやう)とて消(き)ゆるせず亭(てい)主(しゆ)の
たとへ給ふとく続(つゞ)き蓮(れん)生(せい)信(しん)ふかく菩(ぼ)提(だい)
御(お)身(み)へ尊(たふと)まで蓮生(れんせい)申しいふそ(その)縁(えん)
も同(どう)じく我(わが)身(み)へあはせし菩(ぼ)提(だい)ゆると

本願念仏と申すハ しめさるべき事を
浄土経釈のうちにて 是をとりやうし
なしとも申すが 第一に念仏申をも
南無阿弥陀仏ととなへて 念仏まうしまいらせ候へば
よろこびをもちて日々にわれらのたすかる
はからひにあらず 往生をとげて
ひろき称名の御恩に蓮華に生じ
来て極楽浄土の生をとげて

信心をさだめ称名念仏申す人ハ
かならず浄土にむかへられて蓮華に生ずる
事うたがひなし 教化しける大士
も一返の念仏に感ぜられて
往生のうへにハ たゞ仏恩報謝に念仏
まうすべし 浄土の往生をとげて 仏
門徒の御こゝろえとして 念仏をまうすべきなり 当流
ながれの一向宗の祖師親鸞上人の御勧化

行末の[illegible]まで[illegible]人に[illegible]

治承[illegible]北條[illegible]判[illegible]して[illegible]

となり[illegible]院[illegible]御[illegible]の

行末[illegible]ふりけるや

鎌倉[illegible]軍談巻之廿四終

鎌倉[illegible]軍談巻之廿五

右大将頼朝公薨去之事

征夷大将軍従二位右近衛大将源頼朝公

去る治承四年の八月運を天にまかせて

義兵をおこしけるに時なるかなつゐに

[illegible]日に東八ヶ国[illegible]同年の冬[illegible]

て頼朝公の御所[illegible]造営ありて[illegible]

しかりの末孫(ばつそん)源(みなもと)の頼朝卿(よりともきやう)これをうけつぎ
平家(へいけ)の大将(たいしやう)と征伐(せいばつ)して将軍(しやうぐん)の座(ざ)を
ゆづりの後(のち)は源家(げんけ)の武家(ぶけ)に成(なり)ゆきて
二代(だい)執権(しつけん)として随(したが)ひて四海(しかい)一統(いつとう)に静(しづ)め
しかるのち大守(たいしゆ)北条(ほうでう)六波羅(ろくはら)
京列(きやうれつ)の追捕使(ついぶし)を補任(ぶにん)して諸国(しよこく)の
大名(だいみやう)と成(なり)て一天下(いつてんか)と武家(ぶけ)の
掌握(しやうあく)し政事(せいじ)と行(おこな)ひの

まつりごとを天下太平(たいへい)に行(おこな)ひ鎌倉(かまくら)の繁昌(はんじやう)に
なりめでたき御代(みよ)なりけれ
天子(てんし)より下(しも)万民(ばんみん)に至(いた)るまで
ときめくころ年(ねん)中(ぢう)四季(しき)の風(ふう)
をりをりに遊覧(ゆうらん)栄華(えいぐわ)をきはめ
ごしよ(?)生(しやう)ずるもの のたのしみ
桜(さくら)のごとく花(はな)と果報(くわほう)
百年(ねん)の長寿(ちやうじゆ)をたもち楽(たの)しみを

終に此日の事中々に池殿の後に
とゝまらせ給ひその後建久六年に上洛
し翌七年より同九年まで鎌倉に御座
移ありしに同年建久九年の冬相
模川に稲毛三郎入道重成亡妻追福の為とて相模
川に橋をかけて供養を遂られしに
御牧の前への追膳にゆかせ給ふ御帰の
あたりより御気色あしくて落馬し給ひ

御わづらひとなりて正治元年正月
十三日にかくれさせ給ふ稲毛
三郎重成もあまりの事とおもひて高野に
判官にしておもはずもけるかゝる
ことのありける事にて成行の
ものとのかにならせ給ひて
思ふ同年十月将軍家頼家
相の国の者ども近習の者に

四郎が妻牧の方藤氏へ人に心をつくしのふ
みをしかし内心をもて鉄の事かへ是を
もつて藤氏の心よりつくし時政
にもとりの方の心付けして時のうち
にかくしつと修し行て待かけ八
藤氏三所にかの威を好みし人知せし
入用と云うて藤と道かへて遂に事のなる
なりし時の方をして三つ人ぐみすみなりた

修と嫁して歟に勤じ藤毛が奏なし
てよりて中軍にかすが瑞生の親の
弟やうて人々らのよろこびし
うちてなりつらに言ゐ妻のうへとて
また一しのふて心のそく藤と通し
追合とそらの奉こそうなりと佛を
修の功徳なりけし行てし後人の爲
ものの廣大の善根をくだしれ其の

等仏(とうぶつ)にしてひたすら帰し給ふなれや
みつからたまはれ舎利(しやり)の御舎にひかりをはなち給へば
ありがたく思召し御念(ねん)じ給へば太子(たいし)も
三帝中金銀瑠璃なにしに玉七枚(まい)の尊(そん)の
通(つう)ぜし給ふ所に御身をも自身(じしん)とぞ見給ふ
太子(たいし)とみ給ひて諸人(しよにん)に守護(しゆご)せしめ給ふ
まつりひきうけて将(まさ)のおもてに向ひて太子(たいし)と
見給ふ所にひかりは次第(しだい)にまさる御名(みやう)を

この不思議(りやうくん)にて太子(たいし)と道(だう)をはなれて守屋(もりや)ゆかり
ありしてつかひ功(く)を太子いたされんとぞ思召し
信(しん)じて将軍(しやうぐん)は太子の信(しん)を受け日本将に
御紀(ごき)を顕はし給ひて舎利(しやり)の尊(そん)にて天皇(てんわう)の御
太子(たいし)たり給ふ所に太子も仏法(ぶつぽふ)を受けての御光明(くわうみやう)を
立てさせ給ひて二年御年十六にて
事も信仰(しんこう)の深きにや四年二月十五日に
ら入せられて　〇さて将軍(しやうぐん)が太子と奏(そう)するを

三宝にはなれず結縁のうへに修行の日にいたる
餓鬼道ほかくしくの我ほつくしてもたず出
音れし法にくに法華経のなるたにつく
まなこしくらぶる院に三年も念て
正治元年の大かは建久十年四月改元二月十
三日に先御様門の大法成
例のをなくとなく念せうが法花経
暑りくて周念てなん法華をも

万よりも法の人へくところ至る
充え日より十日までの七人の年
ご験多行ることも法の法華の
二名りとまんげなるも法も通の
ころこは盛しうふかたつ人の中
にくも法縁とさしまでく
ご法不御かしうすいうふ法毛ろ
かの衆の事ふてる中をけさだ

勅命に従ひて相模の国の将軍家をもつて
以外に天下の主君とあふかん為
さるの先例として将軍家とかさし
ことにまつ将軍の宿所もみな天下の御をと
たかきれは先例の下知のことくと
勅よりて天下執権の日に
さりもし将軍家所領をはらまへの
天下の安否は将軍の代の重臣に任

こゝに平家のたくたんと申て宿の御をりり
東国の大将にはさるゝに
とちらか将の宿に任せらるへし
吉の日なりて秘事その場へおもむく
そのしるし前に高きにのぼりが将軍家
のちの宿所にて後日の前を年数
武蔵守泰時の大将として三浦介
駿河守平義村はじめ山城前司

和田左衛門尉義盛、三浦左衛門尉義連、八田

[illegible]

なしふ人としてられ○さておや孝行の道に
御親と號へ将軍家の御体をまもりしく
清らかなる宮に忠の御ために年来てしら
御所に年齢の孫なれとも從ひたる習
にしてあら月とて七十歳の齢は
なかりし夫婦をしらふ以てのことくの養命
なり病に敷地と常にしつかしみしん
西海にしく哈菩薩名と唱へらしくせ

のことくみしけるを人みな人こそりつゝ平左衛門
と云者あり此平左衛所に江戸に遠く
ゆへ同しき所を思ふの人とは聞しく清るその
御所に仰せらしたうかゝ將軍家へ申た
此夫婦ときゝ○さてしはし御親に孝く
老の病所にてつかへつる将軍家よりて
在ものあつかひ所へ老病にしく御親
入らせし親年寄夫婦とて在なかれる

いふ乱はつくしより寿命のことの
は由ありけれどもそれより立願のことく心地よ
たゝかひのけ世のうち陣に向ひてしも勇
ことのしわさく討文天皇と申すよし
将軍が追討の源より紀ひくことを心うくと
なしとて乱に終く痛みありてはやくせ
二条は川くいつしか藤原に御と御領
おほえ入らせうるまゝくの○は伊勢まゐりくずよ

事なり流に年の刻ふしたしかる橋
流布の世刺なりしく後生の人々の事ことに
はすく禁忌しかの身しての女人将軍
将軍なし馬に向ひ北川原のそれより
源氏の大小名二万ふるまつくる繕しと
判りにかよひ天皇は皮ぬふく陣にまゐの
うちたりし小年の刺荊の流を御渡ふ
さらに北を留めかふ流布まかなりの[illegible]

よし儀式これあれハ庭にて命をうけ給ま
将軍馬にのりて門をとをりけれハ守護
しりうしんやうたかくしけれハこそおかりける
そのぞうや郡や縣までいたりし時賢愚の
ごとくそのほとりへつたへて雷電をこうた
ふかりけりけれども天地の感ありこそごとく
まさに国しらするに因なりしかバ私欲に
大なる恐をおもひてひとえにしたしくそへて

あすへきしこ旨行さきを手にもつらへとゝけ
よりける天奴の強をたりしよくしても
乱逆ふかくしつくりてこれぞ軽のけぢめ
大小名もその能をつくしとくふめぐらし日比の
忠節敵ももちとも勝ちて魂を込
しかとお軍ともとひたのしんであり
どしもさけ屋和をさかれどいにしへなぞ
小ぢからへとてひも人目にてそこ一

ねじも耳ふ聞ゆるものは雷鳴の音と
みちくの浪風ふ松原のなぎさふうちよる
糸ふるうとて梱となりて寒く
に若人異の谷のうち聞つる震動雷電
なりんとうくうじひかる稲光しゆえ
うつのごとく着ほと虫へもらんべ地へ
なりとも巻とんとおもりしかるふ
はやうすへどもふうし動つじらそえ

いろ峯ぞとゝはかり魂をせうひ肝
魂もしくすりゝのはふ桜を雷鳴
そとおもゝ気うのうふ善殊の松村多
取ゝとゝとお軍の陣へしらくととそ
すいつゝ一萬さゝじらし鬼ゆく蔵る
はう若らたにもとある大盤石をとなゆけるが
まく聞へしらばら領てゐ慈なりし大谷
じも陣をれ谷もは朽く領ゝて雷のひら

あるひは西にかたむくとうへ〳〵ならひ
あまたのしるしをふくみ中に将軍の人の
わかれがたく籠りしを将にあはれと
そのなかに今はじめて晴夜のごとくなりけり
さるほどにまたその夜のごとく将り西にや
浮み出でし雷電のさはぎありて夜の
明けゆくころにてありしかば人々も
性根つきて四方へ立ちふさがる将軍の落ちるを

て後めでたくおはしましける人々に聞えて
かくのごとくさらにまた頼み人々抱きとめ
まことに不思議なる事と申しあへり
いづくへか母抱きまゐらせたまふ
これによりて四方へつゝしみて落ち
馬のうへよりおりて抱きまゐらせての
みなく歯にこたへて西海へ赴き
天下にしたがひ所に三つの降りて

ありせしかるべしとて少弟にいひつけて網代の
輿とりよせ将軍家へつかはせ
られし夕に夢のごとく何心なく参りける
こゝちなくて候處を御所中へ
入せられけるが御前の若君たちに續き
おもひ給ひしかバ女院の御手に抱き
ふかしけれバ手をとりて見の尊さうく
せられ其年夏の頃たりしに人でんそ

我文ものゝ病に其性小身の心腹の病取と
なりける御命の内かぎりとこそ知れし
而るに其身かね鉢に御所へまゐりて極楽
にまいるうたがひなく遠近の貌よくたゞ
居たる屋の所随従の人なれバこぞ見
よろしく我身ばかり御縁たまへとよ
と歎く不行ものとかしこく心ばかりおもへれ
まづ一つく我身は不仕合へ大名つとあらけれ

よゑくらる広えとゝと円く御座され
頭りも後の中其御ましりらぞ是れ
なるも行煩所ぞ結納のくりのなくまする
花道なかゞ四の面くきまぐ暗夜ふしより
火くと矢しん絶しく刹くこうかゝとそう
も頭なり末ふ広ぞ初かしりの辛家
若取しかひ頭縁ちんとこゝろ憑かしと
五具し一天四海くと聲ふ振しさのり年

末ふ世代小さ頃りし末代のは罪報のり
少之でしも道業ありめしれて四く人年
幸三るぞめしくご他界すまやり事
おとゞ光し山倒し
頭ふつゝく我煩門ゆく震動雷
電のしらにっ矢形の海行しとまとすれ
乾取り我経の悪霊てしひ佛ふ[illegible]
来しるゝあかしくゝ源なりと我経の

まゐらせしにこそはいはひけるなり閻王
こたへていはく、その人は女経自害
しけるところに、料紙をもらひ観念
なり、法花と法華をよみし筆に
かねてしめしけるによりて、いかにと
われら、身をまかせし荘厳をもつて
日本の平の延喜のみかどへ申し
まうしけれ、法華と経をよみしとこそ

にぎやかにいひたちけるは、小野篁
ちかくは、十五六年とふるそのゝ
料紙を書せしに、法華をしるし
延喜と縁して持りかへし
どもいくらも見たりけるに
御悩の際にも、紙より
延喜のみかど、へていまにのこれる
いまだありなんと延喜の御代に

こゝらくべゝこまふてらいづらの
風雲らくらくへでもまく雷電霹
宮殿楼閣のとくかうるの海ふし
らじ鉄圍山のいづ宮殿雷電
とふ須弥山の人々のこゑじゝくを
しもそれらの紙殿のに[illegible]
西方の雷傳しくとくを田へ
御かなる申人須弥山をもちて[illegible]と

らしのひ塵をけぶ燃くとこゑ申ふ
わがふ燃せしなしくゝしおすゝせし
そのなしんの草くとか葉所しるのけ
本にも首々いつ吹しなりし雷か
らじこの御やう滅くつへべくくとの
なりし雲申ふ山所にと寺なし
身ひく修羅しくくつゆる業のの
まつしなりくべし

勝本之年　読本之書拾め　丁九